

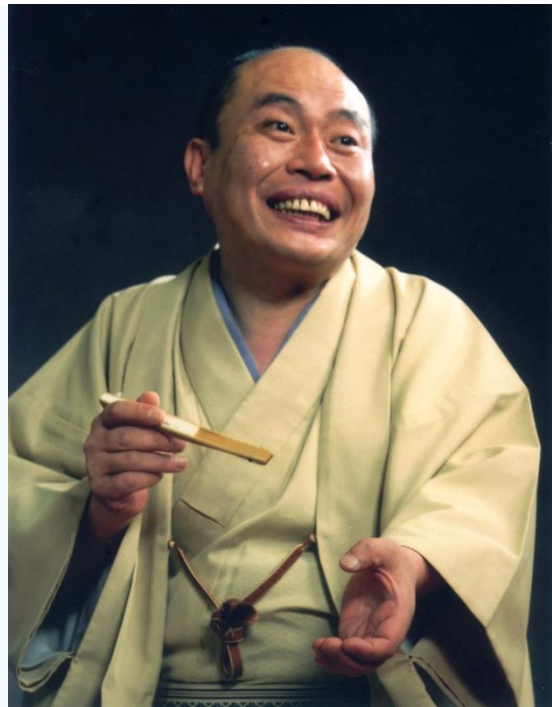
瀧川鯉昇に聴く！

第28回北とびあ若手落語家競演会

9月9日(土)開催・今年の北とびあ若手落語家競演会のゲストは、ゆるりとした佇まいと独特のテンポで観客を魅了する、名人・瀧川鯉昇師匠！落語界のいろいろや、今回の競演会について、師匠にじっくりとお話を聞かせていただきました。

今、若手がすごく元気で、そういうのは初めてかもしれない。あたりまえなんですけど、若い人が活気があると、お客さんも同じ世代だからすごい年齢層が下がるんですよ。ものすごくいいこと。(僕らのときは、)お客さんが常に僕らより年上のお爺さんお婆さんしかいなかった。今は若い子が一人で来るんですよ。

でも、商売って難しくて…、インパクトの強いネタを3つ持っていないと、1つ(のネタ)で売れちゃうと、一回りすると人気が終わっちゃう。第2弾ができてから売り出して、第1弾をやっている間に第3弾を作らなきゃ。今はものすごく層が厚いから、期待していますけどね。ただ、なかなか上がってくるのが大変かもしれない。僕らだってまだまだ上が百何十人というんですから。



落語界にとって今はすごくいい時代、有難い時代ですよ。落語以外のことをあまりやらなくても食える時代。僕らの若い時は落語以外のことしかやらなかった。食えないから。40年前は…カラオケのハチトラとか。こう…カートリッジみたいな。カラオケを入れるスナックが増えてきて、夜7時から11時、12時くらいまで、前座・二ツ目に2、3千円のおこづかいでそういう仕事をさせるの。いいか悪いかわからないが、落語以外でしゃべる需要のあるものは一通りやらないと食えなかったですからね、だから変なたくましさはあるんですよ。



▲高座後にも関わらず、疲れも見せずに熱く語ってくれました。

前座から二ツ目の間は恥をかいた回数だけ芸が身につく、そういう業界。年齢も30過ぎるとだんだん見栄を張ったり、恥をかきたくなくなるんですね、そこで成長が止まるっていう風に僕らは言われて。だから一番恥がかける時なんですね。お客さんも完璧なものを望んでくる人もそんなにいない。だから前回よりもよくなったとか、前回より面白かった面白くなかったみたいな比較の連続。

僕らのときは、田舎で、小学・中学くらいから興味を持って、(落語家に)なりたいて思っても、資料がない…けど、本を読んだり、ラジオを聞いたり、寄席がどの辺にあるのか、図書館行って東京の地図を調べたり。少なくとも入門する前に1年2年は寄席に通っていたわけですよ。でも今(の若い人)は、思い立ったように噺家になりたいて師匠のところへ来て、寄席を知らないやつがけっこういるっていういろんな人からも聞きますよね。「これ新宿の末広(亭)に届けて」って言っても「へ?どこ?」って。我々の時とは違う。逆にこの時代は、そういうのもいいのかもしれない。過去の情報を山ほど知っていてもあまり役に立たない、むしろ真っ白な状態の方がいいって、考える人が増えてるみたいですね。

噺家の修行の中の、ごはん炊いたり洗濯したり掃除したりっていう生活のところ…、ノウハウを覚えたらもうそれでやめればいいのに、それを2年も3年も続けるもんで、明るい子もすっかり暗くなる。そうなった時にはもう若さもなんにもない。あの修行考えないとだめだよって、昔、お囃子の人間国宝みたいな師匠・おつや師匠が(言っていた)。

いいか悪いかは別として、その頃に小柳枝師匠や談志師匠のところは、一度飯を炊かせて間違いなく炊けることが分かれば、もういいと。できたらもうそれでいい。明日から映画を見たり音楽聴いたり、金がなければ図書館行ったり、異業種の仕入れの話を聞いたり。うちの柳昇師匠もそうで、「俺んどこにきてお前ら飯炊きになるわけじゃないんだから」って。

10代でこういう社会に入って、口のきき方、お辞儀の仕方…そういうものまでも仕込まれてきた業界らしいですね、もともと。その名残が残っている。掃除をまずさせて、飯を炊けるようにさせてみたいな。…うちは鯉斗には二度と掃除させない、あいつは掃除はこういうふうに（四角い所を丸く拭く仕草）するんだもん(笑)。あと障子の棧をね、下からハタキをかけるやつが何人もいたんだよね。階段を下から掃いてて、なーんかお前が掃除すると埃っぽいんだよなあって…。

でもなんか、噺家ってそういう人の方が面白いんじゃないかって。そういうところがある業界なんで。だから面白いと思います。



▲浅草駅前、ポーズを決める鯉昇師匠。

（ご自身と弟子たちについて、）結構なんでもありませんけど、例えばうちの中でタブーになっているようなことを2回、3回やったらもうダメ、この業界にいられないよという事だけは伝えています。遅刻してきたら10年間は使わないよって。…割り切っていて冷たいのかもしれない。あんまり優しくないのでしょね。

真打の人数だけルールがあって、みんな違うから、よそには入れないですよ。基本は自分の師匠からされたこと、してもらったことの繰り返しですかね。

でもまあ、時間がかかる商売なんで、そんなに焦らないようには言ってるつもり。やっぱりものさしがないんで、仲間と比較して自信を持ったり落ち込んだり…。だから、小柳枝師匠がよく言っていました、「あいつより俺の方がちょっと上だな」と思った時がちょうど肩を並べているくらい。あいつが上だって思った時は（実際は）ものすごい上。自意識過剰なんで、芸人って。でもそれが、エネルギーになる。

本当は、僕らの世界は一等二等ってつけないところに価値がある。…っていうのは承知で、でもこういう競演会で一等二等を付けられるのは励みになる。

（北とぴあ若手落語家競演会について、）この会で、トップになれなかったからってすごく悔しがっているのを何度も楽屋で見えますよ。このメンバーだったら色っぽい噺をした

らこいつには勝てないとか、与太郎噺やったらこいつには勝てないって、ネタ選びから作戦立ててくるわけですよ。自分が何とかなるなってネタの中で、相撲と同じですよ、相手を見て、作戦を立てて、高座上がってくる子もいるんじゃないですか。だから本当悔しい！って、楽屋で終わった後、何人かいましたよ。

でも面白かったっていう定義ってアバウトですよ。どうしても笑いの量だけじゃないでしょうけどね。

前に、中学校での落語会が2校あったんだけど、午前中の学校はバカうけして、午後の学校は全然うけずに終わっちゃった。翌日に（生徒たちの）感想文を見たら、午前中にバカうけした方は「おもしろかった」しか書いてない。午後は「古典、日本文化に触れて～」みたいなちゃんとした作文なんですよ、もう、なにこれって。午前の学校は『演芸会』っていうタイトルで父兄でも近所の方でもどうぞで、午後の学校は『芸能鑑賞会』って出して、ちゃんとした指導なんですよ。（北とびあ若手落語家競演会というタイトルも）競演会じゃなくて、『若手芸能鑑賞会』ってしたらどう？（笑）

若手の時って、例えば明るいとか、固まってない持ちものが楽しみなんですよ。

意外と、お客さん自体が普通の寄席の延長くらいの感性で楽しんでくれると、本人も気が付かないような力を発揮することもある。当人だけが気づかなくて、お客さんとか仲間内が「やっばこいつすげえな」って。だからお客さんも、（最後に投票するって）承知しているんでしょうけど、「え、一票入れるの？」っていうくらいのスタンスで客席にいてほしいですよ。競演会なんだけど、そこを意識しないで座っていてほしいですよ。

もう持ちものがみんなそれなりにあって、あとはこの日にどうやって表現するか。でもこれだけ回を重ねてますから、お客さんの方がもう慣れてるっていうか、会場のいい雰囲気を作っているような気がしますけどね。毎日、北とびあの前を歩いてたからわかりますよ（笑）

（住まいの北区王子について）平成4年に出てきて、25年になりますかね。ちょうどバブルの崩壊前ですかね。…その頃茗荷谷にいたんですけどね。住んでたアパートの南側が売りに出て10階くらいのマンションが建っちゃうと真っ暗になっちゃうわけですよ。大塚、巣鴨、駒込、田端、でまだ高かったんで、山手線を出ようと。それで巣鴨から明治通りを出

たら王子に着いて。越したらすぐ南北線開通して、すっかり便利になっちゃった。王子の飲み屋も何軒も僕もともと知ってて、前座の時から。王子は僕なりに知り合いがいて…居心地のいい街ですからね。

(インタビュー 2017.06.07)

瀧川鯉昇 プロフィール

昭和 28 年 静岡県に生まれ、大学卒業後、八代目春風亭小柳枝に入門、「柳若」となる。

小柳枝の廃業後、春風亭柳昇門下となり、昭和 55 年、二ツ目昇進「愛橋」となる。

平成 2 年、真打昇進、「春風亭鯉昇」となる。平成 17 年、「瀧川鯉昇」と改名。